

大学生における個人的・社会的居場所感尺度の作成と精神的健康との関連 —対人ライフイベント別にみた居場所の効果—

学校教育学専攻
臨床心理学コース
M10056C
田代俊介

第1章 問題と目的

本研究は、大学生の精神的健康について、居場所の観点から考察するものである。先行研究には、①14の居場所感をすべて含めて検討した尺度を用いていない、②「個人的居場所」と「社会的居場所」を分けて尺度を作成していない、③実感度のみで居場所の有無を測定しているという課題がある。そこで本研究では、居場所を「普段の生活の中で、そこにいたいと感じ、実際に過ごすことのできる場所」と定義し、「個人的居場所（一人で過ごせる居場所）」と「社会的居場所（家族と過ごせる居場所、友人と過ごせる居場所）」の3つに分類した。

本研究では、先行研究で不十分な点を考慮して、個人的・社会的居場所感尺度を作成すること、居場所の種類と数の2側面から精神的健康との関連を、対人領域でのネガティブライフイベント（以下 NLE）経験別に検討することの2点を目的とした。

第2章 方法

調査協力者 大学生 311 名（男子学生：75 名，女子学生：236 名）。

手続き 2011 年 6 月～8 月に、講義開始前または終了後に質問紙を配布し、講義時間内または時間外に回答を求めた。

調査材料 (a) フェイスシート：大学名，性別，学年，年齢，居住形態。(b) 居場所感尺度項目：個人的居場所感尺度は 27 項目，社会的居場所感尺度は 42 項目を用い，友人と家族の 2 種類について回答を求めた。採点方法は，Ferrans&Powers (1985) の方法を参考に，実感度をその対の必要度で重みづけすることによって算出。(c) 居場所の有無，場所，人，日数，

(d) 自己肯定意識尺度（平石，1993：「對自己領域」の「充実感」の 8 項目のみ使用）。(e) プライベート空間機能尺度 7 項目版（泊・吉田，1998），(f) 日本語版 GHQ-12。(g) 達成・対人領域別ライフイベント尺度（高比良，1998：NLE 短縮版，15 項目を使用）。

第3章 結果

個人的・社会的居場所感尺度の作成 各尺度で，天井効果がみられた項目を削除した後，因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施した。因子負荷量が.40 未満の項目，二重負荷がみられた項目を削除し，尺度を作成し，信頼性と妥当性を確認した（Table1～4）。

Table1. 個人的居場所感尺度の因子パターン行列

質問項目	I	II	III	IV	V	共通性
I 否定的感情の生じにくさ ($\alpha=.86$)						
17 不安を感じることが少ない	.98	-.06	.00	-.06	.04	.89
16 さみしさを感ずることが少ない	.80	-.04	-.02	.02	.07	.64
18 落ち込むことが少ない	.75	.03	-.06	.05	-.03	.58
II 本来感 ($\alpha=.88$)						
25 ありのままの自分を出せる	-.04	.99	-.04	-.05	.03	.76
26 自分らしくいられる	-.02	.91	-.02	-.05	.04	.89
27 ありのままの自分でいい	-.01	.61	.13	.13	-.01	.56
III 思考・内省 ($\alpha=.76$)						
7 自分のことについてよく考えられる	-.07	-.08	.88	.00	-.04	.69
8 物思いにふけることができる	.01	.01	.76	-.05	.07	.58
9 1日のことを振り返ることができる	.02	.08	.55	.03	.05	.38
IV 充実感 ($\alpha=.79$)						
22 がんばって取り組めるものがある	-.02	-.07	-.02	.93	.06	.78
23 熱中できるものがある	.00	.01	.01	.83	.01	.71
V しがみつき ($\alpha=.87$)						
19 ここが居場所だと言い聞かせている*	-.04	-.03	.05	.12	.77	.59
20 唯一の居場所である*	.11	.10	-.02	-.10	.64	.48

*は逆転項目

Table2. 社会的居場所感尺度(家族)の因子パターン行列

質問項目	I	II	III	IV	V	共通性
I 他者からの自由 ($\alpha=.89$)						
16 人を気にしなくていい	1.00	-.04	-.05	-.02	-.01	.87
17 他人のペースに合わせなくていい	.95	.03	.00	-.00	-.06	.88
18 人から指図を受けないですむ	.58	.01	.10	.04	.12	.54
II 役割感 ($\alpha=.90$)						
41 自分が役に立っている	-.02	1.01	.02	-.03	-.06	.92
42 自分に役割がある	-.03	.91	-.05	-.03	.09	.80
40 自分が必要とされている	.07	.58	.11	.12	.03	.83
III 自己肯定感 ($\alpha=.87$)						
14 自分に自信もてる	-.03	.04	.97	-.01	-.06	.87
15 自分はうまくやれる	.00	-.01	.91	-.02	-.02	.78
13 自分の能力を発揮できる	.05	-.04	.51	.08	.24	.55
IV 否定的感情の生じにくさ ($\alpha=.84$)						
20 不安を感じることが少ない	-.04	-.04	.04	.92	-.07	.73
21 落ち込むことが少ない	.02	-.05	-.02	.81	.10	.71
34 ひとりだけ取り残された感じがしない	.07	.27	-.06	.56	-.06	.56
V 目標・対象の共有 ($\alpha=.86$)						
23 同じ目標を持つことができる	.05	.01	.02	-.13	.91	.77
22 一緒になって打ち込めることがある	-.07	.04	-.04	.13	.84	.79

Table3. 社会的居場所感尺度(友人)の因子パターン行列

質問項目	I	II	III	IV	V	共通性
I 充実感と共有 ($\alpha=.91$)						
31 がんばって取り組めるものがある	.99	-.05	-.13	.04	-.03	.87
32 熱中できるものがある	.94	.04	-.07	.06	-.00	.83
23 同じ目標をもつことができる	.62	-.07	.25	-.09	.03	.60
22 一緒に頑張って打ち込める事がある	.58	-.02	.24	-.07	.06	.63
II 他者からの自由 ($\alpha=.92$)						
17 人を気になくすいい	-.05	.96	-.06	-.02	.08	.89
16 他人のペースに合わせなくていい	.04	.96	-.06	.02	.01	.93
18 人から指図を受けないですむ	.00	.74	.14	.02	-.07	.64
III 被受容・安心感 ($\alpha=.91$)						
2 自分のことをあたらかく受け入れてくれる	-.01	-.11	.96	-.03	.04	.84
1 自分のすることを認めてくれる	.02	-.03	.86	.02	-.02	.74
4 安心することができる	.03	.11	.71	.06	-.00	.70
6 落ち着くことができる	.03	.20	.63	.10	-.05	.67
IV 本来感 ($\alpha=.96$)						
37 ありのままの自分を出せる	-.02	.03	.00	.97	.00	.95
38 自分らしくいられる	.02	.02	.01	.92	.03	.95
39 ありのままの自分でいい	.03	.01	.05	.81	.02	.80
V 非孤立感 ($\alpha=.93$)						
34 ひとりだけ取り残された感じがしない	.00	.02	-.04	.04	.94	.90
35 自分だけ浮いている感じがしない	.03	.06	.02	-.03	.90	.88
36 ひとりじゃない	.01	-.12	.24	.25	.51	.73

Table4. 各居場所感尺度と諸変数との関連(Pearsonの積率相関係数)

	個人的	社会的 (家族)	社会的 (友人)
居場所の有無	.44 **	.44 **	.53 **
自己肯定意識	.45 **	.48 **	.61 **
プライベート空間機能			
専有	.53 **	.30 **	.34 **
共有	.24 **	.30 **	.46 **
自己解放	.31 **	.24 **	.33 **
GHQ-12	-.36 **	-.33 **	-.39 **

* $p<.05$, ** $p<.01$

居場所の種類と精神的健康との関連

各居場所感尺度得点の平均値以上を居場所あり、平均値未満を居場所なしとし、居場所の種類 8 群(「なし」、「一人のみ」、「家族のみ」、「友人のみ」、「一人+家族」、「一人+友人」、「家族+友人」、「3種類」) × NLE 経験 2 群(高群, 低群) を独立変数, GHQ-12 得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った結果, 10%水準で交互作用が認められた ($F(7,295)=1.76$), $p<.10$). 下位検定 (Tukey 法) の結果, NLE 経験が少ない時, 「なし」、「一人のみ」、「家族のみ」群は「3種類」群よりも有意に ($p<.05$), 「家族+友人」群よりも有意傾向で ($p<.10$) 精神的健康度が低かった。また, NLE 経験が多い時は, 「なし」群は「友人のみ」、「3種類」群よりも, 有意に精神的健康度が低かった ($p<.05$)。結果を Figure1 に示す。

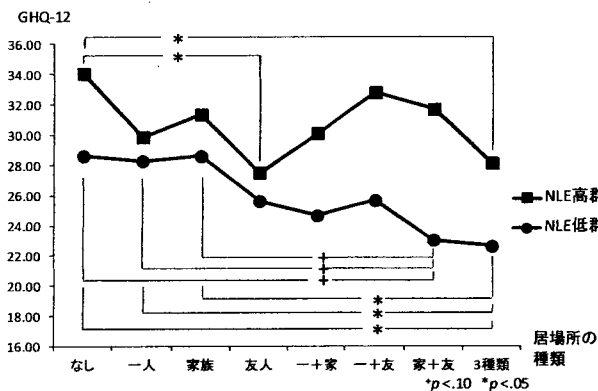


Figure1. NLE経験別にみた居場所の種類がGHQ-12得点に及ぼす影響

居場所の数と精神的健康との関連 従属変数を GHQ-12 得点とし, 居場所の数 4 群(なし, 1か所, 2か所, 3か所) × NLE 経験 2 群(高群, 低群) の 2 要因分散分析を行った結果, 1%水準で交互作用が認められた ($F(3,303)=4.28$), $p<.01$). 下位検定 (Tukey 法) の結果, NLE 経験が少ない時, 居場所がなし, 1か所の群は, 居場所が 2か所, 3か所の群よりも, 有意に精神的健康度が低かった ($p<.05$)。また, NLE 経験が多い時, 居場所がなしの群は, 居場所が 1か所, 3か所の群よりも, 居場所が 2か所の群は 3か所の群よりも, 有意に精神的健康度が低かった ($p<.05$)。結果を Figure2 に示す。

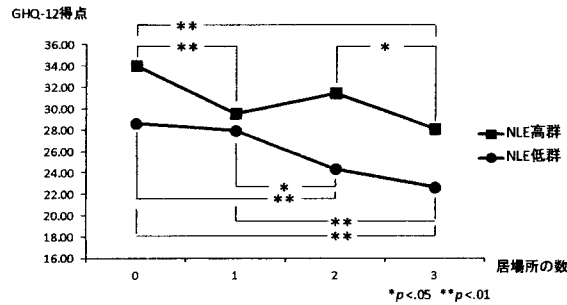


Figure2. NLE経験別にみた居場所の数がGHQ-12得点に及ぼす影響

第4章 考察

NLE 経験が少ない時の居場所の効果 居場所を複数持つことで良好な精神的健康につながり, その居場所には「友人と過ごせる居場所」を含んでいる必要のあることが示唆された。

NLE 経験が多い時の居場所の効果 NLE 経験が多い時は, 居場所を複数持つことが必ずしも良好な精神的健康につながるとはいえないことが示唆された。また, 居場所を 1か所作ることが良好な精神的健康につながり, その 1か所は「友人と過ごせる居場所」であることが望ましいということも示唆された。

居場所づくりの実践への示唆 「友人と過ごせる居場所」で, その個人が必要としている居場所感を感じられることが, 良好な精神的健康にとって重要であることが示唆された。居場所づくりの実践では, 「友人と過ごせる居場所」を提供することが, 青年期の良好な精神的健康を維持するために重要であると考えられる。

主任指導教員 中村菜々子
指導教員 中村菜々子